

本格的な春が来るとさらに忙しくなる。畑の準備が始まるのだ。畑といっても前にも書いたようにささやかなもののだが、老人二人にはそれなりに大変なのだ。まず土なのだが、毎年少しずつMさんに土を分けてもらって畑に足しているのだが、それでも軽のダンブ二杯分くらいはいつも持つて来てくれるので、それを土置き場まで一輪車で運び、必要に応じて畑などに使わせてもらっている。それに、落ち葉でつくった腐葉土や、妻が頑張つて土間でお世話しているダンボールコンポストの堆肥、それに秋のうちに刈つて集めておいたそらの草、それに必要に応じて石灰や肥料を土地と混ぜてなじませておかなければならない。二人とも素人なので、図書館で本を借りてきてはいろいろ試してみる。妻が借りてきた本が「ぐうたら農法」みたいなタイトルで良い選択眼をしている。

今年は何を植えようかと考えるのは楽しい。あれこれ植えてみたくなるのだが実際にうまく育つて日々使えるものは限られる。それでも、少しずつではあるが二十種類ぐらいは毎年育てている。ハーブの類は宿根のものが多いため毎年植えるものはさらに少ない。種から育てる計画性はあまりないので、大半は苗を買ってくる。近郊の農家では一株五十円とか格安で売ってくれるところがあったりするのでなおさら苗に頼ることになる。それぞれの植物に適した土や水はけの状態、気温や地温などあるようだが、まだ、そこまで気を配って育てるレベルにはなっていないので、私たちに買われた苗は可哀想かもしれないのだが。

先に春の兆しは二月頃からと書いたが、野菜の苗を植えるのはもつと気温が高くなってからでなければならぬ。そのタイミングが今だに良くわからない。地温を高く保つのにマルチという黒いビニールで土を覆う方法があるが、私たちは農家ではないので、毎年、沢山のビニールをゴミとして廃棄するには抵抗があり今のところ使っていない。そのかわり大量に生えているススキを細かく切つて土の上にかけるといふことなどしているが、若葉が大好きな虫の良い寝ぐらになつたりして効果があるのか無いかわからない。ここ北国ではカッターが鳴くと豆や苗を植えるタイミングと言われているらしいが、ここに来てからの記録を見返すと五月の十九日が一回、二十日が二回、二十四日が二回とだいたい同じ頃に鳴いている。不思議なものだ。

そんな素人の畑仕事も一段落する六月の中旬になると、いろいろな草花の花が顔を出し始める。六月の下旬になると、敷地は新しい緑に覆われるので、外かまどが活躍し始める。枯れ草が目立つ内は火気厳禁なのだ。枯れ草に火がついた時の燃え広がる勢いは凄まじいそうで、そんなことになったら大変である。外かまどの出番はこの春の時期と秋に限られる。あの暑い夏にかまどの温度を三、四百度に上げるために、炎天下に薪の燃える輻射熱を浴び続けるのは苦行に等しい。七月に入るやいなや、暑いと感じる日がやってくる。北国にも夏が訪れる。

